

# あぶらむ通信

第6号 1989年11月1日 あぶらむの会発行

〒509-41 岐阜県吉城郡国府町宇津江 TEL057772-4219, 3828

飛驒だより

前号あぶらむ通信をお届けしたのが五月の田植前、昨日は女房と二人で脱穀をすませ、その日のうちに新米を味わいました。稲が成長するのに160日ほどかかります。ずいぶん長い間ご無沙汰してしまいました。皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。

あぶらむの稲は今年は大豊作でした。一反当たり約8俵(480kg)、一反五畝の田から12俵ほど収穫できました。昨年の上割増です。しかし、これが普通なのです。昨年のあまりに悪すぎたのです。農協のライスセンターへ精米にもっていったら、担当の



今年は大豊作です

村田さんも三袋をもちあげるなり“今年をよくできているな”と一言、女房は“本当に”とって顔を輝かせていました。農業は彼女の担当、その一瞬に一年の苦勞が報われるか否かなのです。来年は反当たり10俵と早くも意欲(私から見れば欲の皮がつっぱっているだけ)を見せていますが、素人農業でそれも無農薬では8俵が限度だろうと思います。皆様には申し訳ありませんが、自分たちが食べるものを自分たちでつくって食べるということは、今日では最高の贅沢といわなければなりません。あぶらむの宿においでいただければ、私たちのつくった安全でおいしい食べ物の数々をごちそうさせていただきます。実りの秋はどこか私たちの心を豊かにしてくれます。

土地取得完了と同時に建設を、今年の日記には“あぶらむ槌音元年”と記してあります。昨年暮れに入手した二棟の建物、梅雨前に建てないとカビがはえて使用不能になると大工に云われ、とにかく棟上げだけでもと建設を急ぎました。建物を建てるには整地や資材搬入の道路づくりなど、やるべきことは山のようなものでした。とても人力では及ぶ代物ではありません。土木業者に頼むお金もありません。自分たちでやるし

かないのです。そのころの私は毎日のように、“ユンボ（パワーショベル）を下さい、ユンボを下さい”と夢遊病者のように口走っていました。そんな私を、“大郷もここま



でくれば重症だなァ”と周囲の人々は憐れんでいました。

ところがそのユンボが確かに天から降ってきたのです。東京町田のK氏から、あ

どろんこプロレス最高!!

ぶらむに必要なものならば買って下さいと、後援会を通して二百万円の寄付があったのです。あまりもの額の大きさに恐れをなした私はご辞退したのですが、大郷にあげるのではなく神様に献げるのだからというその一言で、私たちはありがたくそのご好意をいただくことにいたしました。

ユンボの力は偉大です、以前は四、五日かかっていた木の株おこしも四、五分でかたずいてしまいます。1トンほどの岩も軽々とつり上げてしまいます。人力では一ヶ月かかっても掘れない穴を、わずか20、30分で掘ってしまいます。ユンボという機械はそれほど便利なものなのです。しかし心して使用しないと、営々とした自然の営みを一瞬にして破壊してしまうのです。土地にユンボのツメを入れる時、ここをけずり

とっていかどうか、いつも迷いが生じます。しかし、私たちが生活するには道があります。整地も必要です。土地と対話しながら、調和を保ちながら、少しづつ手をかけて行こうと思っています。

そんな訳で、フィリピンから帰って今日まで、私は牧師ならぬ土木師として生活してきました。おかげで6月24日、二棟の棟上げを迎えることができました。その日は興奮のあまり深夜に目が醒めてしまいました。その時はどういう訳か先に旅立って行った人々の顔ばかりが浮かんできました。両親はじめ沖縄のライ園の人々、そして若くして逝った青木マリヤなど、私に生きるための勇気を与えてくれた人々が次々と浮かんできました。

こうして棟上げを迎えることができた背景にも、不思議なことがありました。建設にあたり基礎工事を誰にたのもうか、可能ならば教えてもらいながら自分たちでやりたいと思っていました。そんな時、同じ宇津江で基礎工事を専業とする洞邦宏さんと出会いました。不思議なことに洞さんはその昔、先年逝った私の義兄の家に寄宿していた人なのです。これも何かの縁、逝かれたお兄さんへの恩返しと思いお手伝いしますと多忙の中私たちに基礎の打ち方を教えて下さいました。コンクリート打ちの日は子供たちも総動員しての作業でした。一番しっかりした基礎だと私は思っています。

何故なら、あぶらむの里に建物を建てるために、先に逝った人もそして子供たちも、全ての人のおもいが一緒になって出来上がったものだからです。それに洞さんのもう一つの顔は神主、牧師の私と神主の洞さんとで打った基礎ですから、きっと世界一堅固なもの信じています。

博覧会会場建物の最低価格落札、ユンボの寄付、洞さんとの出会い、たった一つの建物があぶらむの里に立つ背景にもこれだけ多くの偶然が重なっています。どれ一つ欠けても、今の私たちの実力では建物は建ちませんでした。きっと先に逝った人々が天上にあって、神様にとりなしをしてくれているのだと思っています。それにしても不思議が続きます。

9月24日、“生まれノ人生の旅人”というあぶらむの記事が、地元の中日新聞に載りました。前号の藤本隆君の記事を中心に、これまでのどの新聞記事よりも一番適切にあぶらむの会の内容を伝えてくれました。さァー、その日から大変、毎日のように電話や手紙で問い合わせがありました。どれも切実な内容ばかりでした。私たちあぶらむの会の働きをより明確にするために、いくつかの手紙を紹介したいと思います。

「突然お手紙をさしあげて申し訳ありません。新聞にお宅の記事がのり、母に聞き、知りました。私は九月で21歳になったものです。健康な体と人並みの頭も持っているのですが外に出たり動くことが小さな頃から嫌いで、人との関わり合いをさけて生きてきたため、外に出られません。しばらくで結構です。私をそこに置いて下さいませんか。家事など全くしたことのない私ですが、きっと私にできるお仕事があると思うのです。全くの甘えですが、無理なお願いだと思いますが、考えて下さいませんか。このまま家にいて、人との関わりをさけていたら自立できません。そのステップとしてそこで働かせてもらえたら……。」

「突然のお便りおゆるし下さいませ。朝刊であなたの事、あぶらむの会の記事を目にし、思い切ってペンを取りました。実は私の長男を是非あなた様に助けていただき

### あぶらむ収穫感謝祭

毎年10月10日に催していた“あぶらむ祭”今年は11月3日～5日の期間行います。今年は建設中の建物を会場にと計画しています。地元の人々との懇親会、露天風呂、もちつき、テニス、野球大会など楽しみ一杯です。

参加ご希望の方はご一報下さいませ。

たいのです。〇〇に勤める25歳の物静かでナイーヴな性格で学ぶ事の好きな子ですが、現在の社会生活について行くことが出来ず、つまづいてしまいました。私達夫婦の不和、経済的なことなどでずい分辛く悲しい思いをさせてしまったのに、一言も責めたりする事もなく、逆に私を労ってくれる優しい心の持ち主です。ふびんでなりません。この子の様な者でもお預かりいただけますでしょうか。現在二ヶ月位の入院生活を送っていますが、十月中には退院予定です。そのうちに一度是非伺いたいと思っております。」



昨年12月、落札した建物を解体



5月、基礎打ち開始

。人生の良き旅人を育てることを目的としたあぶらむの会、その働きとしてフィリピンプログラムなど、生きた場からの学びとしての実践教育活動があり、また、心疲れた人々が共に集い、そこで触れ合う人、自然などとの交わりの中で、新しく自己の現実に立ち向かう勇気を得て行く、そんな場としての宿づくりがあげられます。

。空家を借りてのあぶらむの宿を始めて二年余、宿の利用に限っていえばいくつかのことが報告できます。

。その一つは短期滞在者で、1～7日間ほどの宿泊です。現在の仮宿は15名ほどの宿泊が可能ですが、宿泊者は全員一つの食卓を囲みます。何故なら、あぶらむの宿に集う人々は皆一つの家族だからです。見ず知らずの者同士が、これまでの自分の人生旅路の中で自分なりに掴みとってきた旅の情報を静かに伝えあっています。また、久しぶりの再会を果たした者はお互いの安否を確かめあっています。そして滞在中、ある人は田畑を手伝い、ある人は一日中薪割りに熱中しています。薪割りは快い集中力が要求され、またストレス解消に抜群の効果をもっているようです。こうして人と自然との交わりを通して都会の日常生活の疲れを癒し、新しい力を得て各自の現実に帰って行くのです。

もう一つは長期滞在者です。昨年の藤本君のことは前号で紹介しました。今年は馬場慎也君(18歳)と一緒に生活しています。彼は高校中退後、今後の方向を見定めるため一年の約束でやってきました。寡黙で、コツコツとよく働く働き者です。どんな



6月、ほぼ棟上げ完了



に辛い仕事でも決して逃げません。休日のパチンコが楽しみようです。半年で顔つきがすっかり変わりました。

前号あぶらむ通信の藤本君の記事は静かな反響をよんだようです。彼のことを伝え聞いて三人が訪ねてきました。しかし、体験生活期間中、A子さんは10日間で、B君は3日間で、C君に至っては15分で行ってしまいました。私たちのいたらなさも多々あるのですが、子育てに対する親の責任感の希薄さや育てかたの歪みを強く感じさせられました。そして今度の新聞記事です。一時の間ここで生活を共にしながら、自分自身の人生旅路を旅する力を育み、これからの歩むべき方向を見定めることを求める人々が、これからは増えることが強く予想されます。

子供達も立派な労働力 知れませんが、宿の主人とは正反対の人ばかりです。彼らの持つ特徴はどれも大切なものです。しかし、私たちの今日の社会はそれらの特性をもって生きるにはあまりにも矛盾に満ち満ちています。自分の気持ちに素直に生きるには、その人によほどの精神的エネルギーがないと不可能なことです。

自分に正直に生きたい、それは誰もが願う素朴なことです。それはもはや贅沢なこと、そんなことが許されないのが私たちの社会です。社会の歪みがいつしか正直者の歪みとなり、社会に適應できない自分が病人であると思ひ込み、さらに自分を苦しめているのです。そんな彼等に必要なのは、“今のあなたのままでいいのですよ”という素朴な一言ではないでしょうか。

しかし、私はそんな彼らに特別の処方箋を持っているわけではありません。ただ、この豊かな自然の中で共に汗水を流し、精一杯働くことと、私が出会った沖縄のライ園の人々やフィリピン、ネパールの草の根の人々のように必死に生きる人々を訪ね、彼らの生きざまに触れるという単純な方法論だけです。しかしそのことが、多くの若者たちに人生の良き旅人として生きるに必要なエネルギーを与えてきました。

“教育”（人が人として育つ）ということ、もっと単純なことであるように私は

思います。それが社会の複雑化と共に、みんなで寄って  
たかってあまりにもいじくりまわしてしまい、学ぶこと  
や育つことから喜びや感動をうばってしまったように思  
います。人が育つことも、学ぶことへの意欲も、それは  
共感と感動を出発としています。そして私たちに、私た  
ちの人的成長のエネルギーとしての共感と感動をもた  
らすものが、“出会い”であると思います。人生旅路を  
旅して行く力は、所与として私たちの内に固有なもの  
としてあるのではなく、一つ々々の新たな出会いを通して、  
その度私たちに与えられていくものと考えます。現実を  
歩む自分の足どりが重くなった時、必死で生きるライ園  
の人々の事を思うと、不思議と不確かな明日に向かう勇気が与えられてくるのです。  
私たちあぶらむの会の働きも、そんな切っ掛けを提供できる場になって行きたいと願  
っています。



飛驒の民家の内部

土地取得完了と同時に、あぶらむの会の課題は、前述の通り第二段階を迎えました。  
長短期滞在者の宿やスタッフの宿舎、作業場建設など、どれも気の遠くなるようなこ  
とばかりです。しかし、私たちに残された道は困難であっても前に出る道だけなの  
です。あぶらむの会の働き実現のためにも、社会のニーズに奉仕するためにも、そして  
ここで働く者が生活をして行くためにも、私たちは働きに必要な建物を建設して行く  
しかないのです。多くの人々に私たちの生活を心配していただき、心苦しさと共に感  
謝で一杯です。

現在の私たちの生活は、米や野菜等の自給自足、そして宿、くん煙品、木工品、講  
演会謝礼が主な収入源です。そして近い将来は、現在建設中の建物を用いてのレスト  
ランを計画しています。

私たちの現在の最大の課題は宿の建設です。現在借用中の家では借用期限等もあり、  
十分な設備投資ができません。一日も早く、あぶらむの里に旅人の宿が出来上がるこ  
とを切に願っています。幸い、近くに飛驒の古い民家が空家となっています。売買交  
渉が十分には進んでいませんが、いずれにしろあぶらむの里に建設する宿には、飛驒  
の古い民家を移築しようと計画しています。

あぶらむの会には土地を与えて下さった皆様これ以上のお願いは誠に心苦し  
いのですが、近い将来「旅人の宿建設」ということになりましたら、もう一度お力  
をお寄せ下さいます事を伏してお願い申し上げます。

半年もご無沙汰してしまったため、今回の飛騨便りは長いものになってしまいました。最後までお読み下さりありがとうございました。昨年は10月末に初雪がありました。この便りがお手元に届くころにはもうストーブのお世話になっています。秋も終わり、長い冬がやって来るのです。

どうぞ皆様にはお元気でお過ごし下さいますようお願い申し上げます。

'89,10,3 あぶらむの会 代表 大郷 博

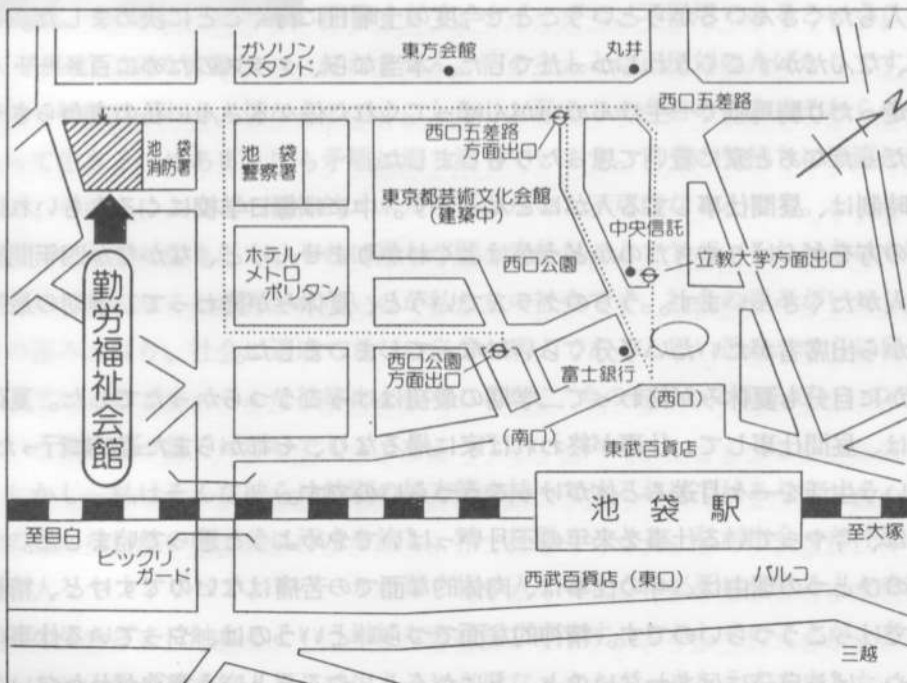
## あぶらむの里展示会

あぶらむの里建設の進行状況や私たちの生活の紹介、そしてそこで作られたものを皆様に直接知っていただきたく、ささやかな展示会を東京にて開催することに致しました。どうぞお出かけ下さいますようご案内申し上げます。

日 時 11月24日(金) 25日(土) 26日(日) 午前10時～午後8時

但し24日は正午より

場 所 豊島区立勤労福祉会館 (TEL.980-3131)



## 仕事と学校と仲間

藤 本 隆 (1988年度あぶらむ長期滞在者)

私は、昼間仕事をしながら夜、定時制の高校に通っています。

私は今昼間はあまり元気がなくて、夜になると元気になります。いうまでもなく昼間の仕事はおもしろくなく夜の学校が楽しいからです。定時制の高校には、いろいろな人が来ています。今私のクラスには、五十歳ぐらいのおじさんもいます。いつもこのおじさんは私たちと一緒に、給食を食べたり、体育の授業でバレーボールやバスケットボールをやったり、時には体育祭で騎馬戦をやったりしています。最初は少し不思議な感じがしたけど、毎日学校へ通っているうちにみんなそういう定時制の風潮になって、今では給食を食べながら、ふざけてじょうだん言い合ったりしています。

先日、体育祭をやった時に、見事私たちのクラス一年A組が全校の中で優勝しました。

その時、そのおじさん佐々木さんと言う人なんですけど、その人が私に「体育委員さん今日は、祝勝会をやるんですか。」と言ってきました。私はその時けっこうつかれていました。もちろんクラスみんな佐々木さんも、明日は月曜日でみんな仕事で朝早い人もたくさんいるからということで今度の土曜日に行くことに決めました。この時は、なんだかすごうれしかったでした。本当なら、クラスのために百メートル全力で走ったり騎馬戦で一生けんめいがんばってくれた佐々木さんに私の方からさそうべきだったなあと家に着いて思ったりもしました。

定時制は、昼間仕事してる人がほとんどです。中には毎日学校にくる人もいれば、仕事の方をがんばりすぎたのかどうかはよくわかりませんが、なかなか四年間続かない人がたくさんいます。うちのクラスでいうと、夏休みが終わって二学期の最初のころから出席者がだいたい半分ぐらいになってしまいました。

確かに自分も夏休みが終わって二学期の最初はけっこうつらかったでした。夏休みの間は、昼間仕事して、仕事が終われば家に帰るなり、それからまた遊びに行ったり、そういう生活を一ヶ月送ると体がけっこうつらいのです。

私は、今やっている仕事を来年の三月いっぱいまでやめようと思っていました。

そのひとつの理由は、今の仕事は、肉体的な面での苦痛はないのですが、精神的な面でけっこうつらいのです。精神的な面でつらいというのは、やっている仕事の内容がやっぱり自分にはあわないのと、とにかくよしやるぞという意欲がわかないのです。



もう一つの理由は、目の前にどうしてもやりたいという仕事のできたのです。今の私にとって、この定時制高校に通っている四年間、念願の卒業証書を手に入れることが目標です。だからといって、仕事の方もいいかげんにはしたくないけど、自分のやりたい事が目の前にあるのに、それを無理にがまんしてまで今の仕事を続けてもという考えたんですけどある学校の先輩に話をしたら、「そんなに仕事の方面で難しくなることはないよ、だいたいお前はまだ十七歳だろう。俺が十七歳の時はまだバカばかりやって遊んでいたぞ。自分のやりたいことがあるなら、どんどんやればいいじゃないか」と言いました。私は先輩の言ったことを聞いてから、はっきり決心しました。

私は、こういう仕事の事ばかり考えているわけではありません。やっぱり学校が楽しいっていうのは、仲間がいっぱい集まるからです。僕は中学の時から、勉強はきらいだったけど、毎日学校に行くのが楽しみでした。学校に行けば必ず友達がいる。これ以上仲間が集まって楽しい所は学校しかないと思っていました。特に定時制に来たら、年上の人もしれば年下の人もたくさんいます。よく「昼間仕事して、夜学校行っていて、いったいいつ遊んでいるんだよ。」と中学校の時の友達とかに言われることがあるけど、ちゃんと遊ぶ時は遊びます。もちろん毎日毎日っていうわけにはいかないけど、体をこわさない程度に、時には遊びすぎて、朝起きれないで会社を遅刻したり、学校に居眠りにきている人もいます。私もその一人にちがいません。

## くん煙品生産

秋の訪れと共にくん煙品の製造を再開しました。地域、職場、教会等で共同購入いただければ幸いです。無論一般家庭への小売販売もいたしております。試食品お入用の方はご連絡下さい。

### 価格

・ハム	100g	470円
・ベーコン	〃	320円
・ソーセージ	〃	290円
・タン	〃	800円
・虹鱒	〃	450円

\* 防腐剤、発色剤の添加物は一切使用していません。

## 「今年もあつい夏でした」

— 広島・長崎国際平和ウルトラマラソン (428km) —

西村正和

'86年のギリシア・スパルタスロン (247 km) での提案をもとに、第1回大会が行われたのが昨年のこと。今年も、資金ぐりなど山積みする問題があったが、「平和への歩みは続けてこそ意味がある」という思いから、下田君を中心とする実行委員会の頑張りと多くの人々の熱意によりなんとか第2回大会の実現にこぎつけることができた。



ゴール直後平和の杯を飲みほす筆者

ボランティアの人にも手弁当の参加をお願いする一方、ランナーも航空運賃自己負担という条件の中で、昨年に引き続き2年目のパトリック・マック選手 (英-34歳)、ジェームス・ザレイ選手 (イラン-45歳)、また新しくマービン・スカガーバーグ選手 (米-52歳) を迎え、私を加えて4名のランナーが参加することになった。

### <今年の私のテーマ>

去年この大会に参加して感じた事は、原爆の落とされた2つの日を結んで、広島-長崎428kmを走るという体験が自分なりに戦争や平和、核の問題を考える切り口になるという事だった。戦後生まれの私にとって演奏も核も平和も、どこか他人ごとでしかなかったのだが、昨年は原発を中心とする核の問題の関心を持ち、多くの新しい事を知った。

また、今年は「被害者としての日本」ばかりを強調するマスコミ報道に疑問をもち「加害者としての日本」ということにこだわりながら、文献を読んでいったのだが、それだけでもこの大会にかかわった成果のひとつと言える。

### <大会の様子>

8月6日の正午“Runfor Peace.”大郷実行委員長の合図に、長い3日間が始まった。台風の影響により、小雨降る中、初日は時速9km、快調なペースで進んだ。3kmごとに伴走車が待っていて、水やジュース・パンなどの補給を受けて現在地やコース情報などをもらって再び走り出すというもの。基本的にはこれがゴールまで続くのである。

初日は、125kmまで行ったところでようやく仮眠となった。

1時間後に起床、2日目からはむし暑さがぶり返し、35度の温度の中、疲労と自動

車との闘いになった。

疲れた足をひきずりながら、他のランナーは今頃どこにいるのだろうか？ 今日は何km地点まで行けるだろうか？……そんな事を考えているうちに夜を迎えた。230km地点、誰もいない真っ暗な国道をトボトボと走っていると、遠くに伴走車の灯りが見えてくる、その喜びと叫ぶと、まるで迷子になって泣きそうな坊やがお母さんを見つけた時のような嬉しさだ。250km地点で2日目の仮眠に入る。

2時間眠って起床、3日目の始まり。タイムは去年より随分早いけど疲れと足の痛みで、ペースがあがらない。なんとか目標である360km地点まで辿り着き、1時間仮眠に入った。それだけの仮眠でも目がさめると新しい一日が始まる気になるのだから不思議だ。

8月9日を迎えいよいよゴールに向かっていくという実感がわいてきた。ゴールまであと37kmというところまで来て、ラストスパートする地点を考えていた。その時である。目の前に、伴走チームと本部の面々が立っていた。そして「ここから走るべし」と言う。私は「まだ早すぎる」と言って断った。練習の時でさえ、20km以上走ったことがないのに……。しかし伴走チームもゆずらない。「安全だとわかっているところまで行ってから走るよりも、つぶれてもいいから、ここから走れ、その方が結果的にも早いんだぞ！」その声はまるで悪魔の声だった。「走りますよ、走ればいいんでしょ」なかばやけくそで、走り始めた。途中から応援に駆けつけた下田君や、伴走チームの末積さんも引き込んで3人で走る。それにしても足が痛い。辛い。自分で選んだ痛さではないから、余計辛くやり場のない怒りがこみあげてくる。あとでよかったと思うのは頭でわかっているけどこの痛みはあまりにも辛過ぎた。発狂して叫びたい気持ち。何度も限界を感じ、地面に大の字に寝たこともあった。起きてまた走る。そして遂に、あんなに遠いと思っていた長崎市に突入。伴走の仲間が叫んでいる。「リズムを大切に！」「腕をもっと振って！」あと3kmあと2km、天国まであと1km……。

遠くにゴールが見えてきた。そして3日間、苦楽を共にし、私を支え続けてくれた伴走チームの仲間とともに、ゴールにタッチ、長い3日間は終わった。辛い事も苦しかった事もみんな終わった。

### <大会が終わって>

今回の大会を終えて、私はまた一つ貴重な体験をした。それは「最後の37km」から学んだこと。全て準備が整い、安全圏に入ってから何かをやるのではなく、もっと、冒険し、リスクを負って未知へ挑むことの大切さ。何事においても慎重(?)な私にとっては体で学んだ“脱安全圏”の体験だった。

### <なぜ平和ウルトラマラソンなのか>

「平和をアピールするのに歌手なら歌を歌い、絵かきなら絵を描く。私達はウルト

ランナーだから走るのです」。この大会の提案者であるパトリック・マックは、新聞記者のインタビューに答えそう話していた。

照りつける夏の日差しの中で、暑さに苦しみ、極限の走りをする中で、少しでも44年前に被爆し、死んでいった人々に想いをよせようとした、ジェームス・ザレイ選手の走り。「一見不可能なことにも思えるこの広島・長崎428kmを走って結ぶことによって、不可能にも思える世界の平和が可能だということを示したい！」と語っていたマービン選手。

そうしたランナーたち一人一人の言葉の中にそして走りの中に、この平和ウルトラマラソンを支える精神がある。

未熟な私は、走っているその時はまだまだ走る事に精一杯で他の事を考える余裕はない。しかし、平和に向かって何かをしたいという気持ちの中で、準備の段階で様々な文献を読んだり、多くの仲間とともにこの大会を創りあげ、ランナーとして走らせてもらうことによって、戦争や平和を過去の事・遠くの事として片づけてしまうのではなく、自分の問題として考えられるようになってきた。

そして今「平和は語るだけでなく、創り出していくものだ」という言葉を改めて反芻している。

### 後援会事務局だより

10月17日現在に募金の申し込み総額及び振り込み総額は以下の通りです。

申し込み総額 2,577万8860円

振り込み総額 2,485万8850円

○前号以降10月17日までの募金の申し込み者(順不同)

鶴川久 馬淵明彦 黒瀬禮子 百井幸子 宮城清盛 池田寿美子 川上美砂 萱間隆夫 中村洋 阿久津富男 高瀬由香 深谷麻子 吉村久美 染谷孝章 湯浅貴子 豊里正子 松岡和夫 城間真喜 矢部直美 佐藤一宏 星野一朗 深野毅 西田邦昭 赤井充也 辻真理 伊藤友昭 佐口哲 立花泉 鈴木雄一 浜田陽太郎 寺西裕子 篠宮慶次 林英夫 佐々木紀久江 中村ひろ子 原川恭一 滝沢助蔵 鈴木博士・彰子 鈴木康仁 赤尾昌人 長間四郎 金城瑞子・悦子 熊谷一綱 高坂征男 平田賢一 田中誠 高島光江・富美江 田坂昭範 筒井啓子 村岡薫 伊藤光恭・美保 田頭道登 黒井ミヤ 関正勝 篠田克雄 等農光人 湯浅雅弘 梅崎耕司 新田和子 清水千鶴 森田孝秋 堀切糸子 名取四郎 渡辺幸田 尾兵二 久保田彰・君江 田中信一郎 中村真之介 伊藤謙哉 橋本禮子 諸橋保夫 服部峰子 大和田勝 渋沢一郎 高橋正子 北野春子 若林雅子 尾針明宏・恵子 遠田聖子 本田リン 菊間みどり 河村博之 木村康一 高瀬留美 米内順子 芦沢弘道 岩本美和 大家俊夫 水谷満 森川和之・真美 宮本冬子 清水靖夫 五反田良蔵 阿部潮音 三田幸枝 岩間光雄 広田勝一 木島出 聖公会有志 須藤秀夫 加藤貞夫 田名部匡省 松本信代 塩田純子 武井秀雄・侑代 木田献一 大澤浅香 長谷川順三 石井正郎 糟谷珠子 竹内佳子 今井忍 平井正成 牧野亘子 加納美津子 遠藤恵子 大坪秀夫 馬場康弘 西川貞子 萩野夏生 名取麻子 丸山知子 平岡真 市川聖マリア協会 藤間繁義 阪本吉弘 山本桃栄 三浦直子 味岡努・敏江 桂英隆 小川卓 クボタミキロウ 糸数宝善・敦子